



第172号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長 佐藤昭二
編集人 会報編集委員長 太田秀雄
印刷所 須坂新聞社

女教師研究大会の報告

小山 章子

去る十月三日、須坂小学校を会場として、第十七回上高井女教師研究大会が開催されました。

本年度、女教師委員会では二年継続研究として「人間性豊かな児童生徒を育てるためにわたしたちはどのようにしたらよいか」女教師の自立と自覚」という研究テーマを据えました。

県下の多くの学校で、職員半数以上を女性の先生が占めており、本郡においても女教師の割合は五八・四パーセントという状況が現実です。

女教師委員会のあり方を問う声もありますが、私たちはそのような状況であるからこそ、今、女教師自身が、学校や女教師の姿をみつめ直す意味があるのではないかと考えました。教育現場の半数以上を占める私たちが素直に、謙虚に自分たちの姿をみつめて

語り合い、考え合うことが、様々な問題に直面している学校や教育界を変えていく大きな力となるのではないのでしょうか。

これらのことから、本年度は郡内の先生方全員(男性も含め)にご協力いただいたアンケート調査をもとに、校務分掌の実情やそれに関する委員の意識から問題点(考えを深めたい点)を洗い出し、来年度へ引き継いで皆様に具体的に検討いただくことと、講演会(研究大会)を計画しました。

研究大会当日、長野県PTA事務局の丸山昭子先生を講師にお迎えし、「女教師として生き甲斐をもとう」と題して講演をいただきました。まず最初に音楽に合わせて体を動かしてリラックスさせる雰囲気作りから始まった講演会は、「女教師として幸せ

か」という小グループ討論へと移りました。

「今まで特に考えてもみなかったけれど」と言いつつ、それぞれが熱心に話をしました。そうして私たちがいつの間にか丸山先生の話の中に引き込まれていったのです。

長年教職にあられた丸山先生の実践や経験に基づいたお話にうなづき、先生のお人柄が表れる温かいお言葉に私たちの心も温められ、明日への元気が湧き上がってくるような充実した時間でした。

参加された先生方お一人お一人の表情や目の輝きにも、それを感じることができました。講演後、丸山先生からも「正直言ってこんなにくさるとは思っていなかったのですが、皆さん目が輝いていて、意欲に満ちているのがわかりました。入場する時から温かく拍手で迎えていただくことはめ



須高の山と川

十九ヶ塙

(高山中)

井上地区の南東に位置する大洞(おおぼら)山は、東北にのびて藤山(ふじやま)となり、西北にのびて、この十九ヶ塙となっている「塙(はな)は、若穂綿内との境になっている。

大洞山は、この地域としては比較的高い七七一・三メートルの標高があり、そのふもとから井上の学区が広がっている。大洞山の西北の端にあたる十九ヶ塙は、昔は風が激しい場所として記録されている。井上町の小坂神社の文書に『井上八景』という狂歌が残っており、次のように読まれている。

「十九ヶ塙の嵐 行駒のいななく声を耳立てて 梅花園咲成」と。昔の旅人はこの地の嵐に肌を打たれたことだろう。井上小学校の子どもたちは「十九ヶ塙」へどんぐりや松ぼっくりを拾いに出かけている。現在では、生活科の授業の一環として、一年生が秋に登っている。時折開ける、井上地区の展望に歓声を上げながら、山登りの楽しさを十分味わえる急な坂を登っていく。そのかわり下り坂のすこいこと。周りの木につかまろうとしても、ずるずると滑っては尻もちの連続。そのせいもあってか、井上の子どもたちの中にはこの十九ヶ塙を「すべり山」と呼ぶ子もいる。

十九ヶ塙から、大洞山の「大城」「小城」、そして藤山の「竹の城」へと、井上小学校の四年生が遠足へ出かけている。そこで郷土の歴史や史跡、周辺の集落、田畑、河川の様子を学ぶ機会となっている。

このように、十九ヶ塙に登り口とした大洞山、藤山は、井上の子どもたちにとって一番身近な山になっている。(井上小 町田真弓)

教育会だより

- 10・22 第5回常任委員会
- 10・29 研究小委員会
- 10・31 第5回代議員会
- 11・1 信教全県研究大会
- 11・12 研究会(2)
- 11・16 教育会中間会計監査

於高山小学校・常盤中学校

女教師研究大会講演会

講師 県PTA事務局 丸山昭子先生

「女教師として」

生き甲斐をもとう

リラックス体操・ディスカッションというなごやかな始まり。具体的な体験を折り混ぜての講演の中、多くのことを学び、今後の力が沸き出るような講演会となりました。

一 教師と親は共存の時代
不登校の問題が親の一番の悩みです。その皆さんには、親が親に向いているか、学校が親に向いているかについて申し上げます。子どもは集団の中で育っていくことが非常に理想的です。しかし学校に行かない言い訳を親が自分



で作っていつている気がしましす。民主主義・個性尊重という中で、エゴイストになってしまった部分があると思うんです。また子どもが生活する集団がよくならねばならないということも勿論あります。

しかし教師も手をこまねき背中を向けつつあります。つまり、現象に背中を向ける子ども、学校に背中を向ける親、そして教師。やはり両者で歩み寄っていくことが大事だと思えます。教師がリーダーではなく、教師と親が共存することが重要ですね。

二 生き方を考える

PTA・企業・一般の中で出てくる言葉は「先生が変わってほしい」ということです。自分の生活を守りすぎているということもあります。働く以上大事なことは守っていかねければとも思います。ただその中で、自分が教師としてどういう生き甲斐を持って過ごすかが大切だと思えます。学校へ行っても何もせず手も汚さずに何となく流れに乗って人生を生きていくのはいいか、あるいは、自分が一つのものを崩しながら、批判されながらも自分の持っているものをぶつけて生きていくのがいいのか、そこら辺が大事だと思えます。

また女性は結婚・子育てがありますね。男女平等の考えは大賛成ですが、子どもが「お母さん」と呼ぶ親子関係が自然な道だとすれば、子育てに男性より時間がかかって当然です。だから必死で子どもと向き合い我が子と向き合う中に、自分は幸せだと思える時を作ってもらいたいと思えます。

三 心を育てるといこと

是非、自分の生き方の中で子どもたちを育てることを一生懸命やってください。小学校では特に教育の育が中心だと思います。親たちのとらえ方も、教師の比重を学級指導・子どもを育てるといふ点に置いてきているような気がしています。

しかし心を育てるといいますが、どういう時にどうするということが非常に分からなくなってきたと思います。親も教師も叱り下手になってきているんですね。本当はここで叱って心の痛みを教えたいと思っても、体罰・暴力という名の下に否定され始めている。でも本当に子どもを育てなければならぬ時に、育てるために叱るということ忘れてはならないと思えます。ほめて育てることばかりに心がいつて、その裏に叱ることが必ずあることを忘れないでほしいんです。そして口で言うだけでなく、体を通して子どもと接していくことを考えたいものです。

四 女教師として

女教師ということについて三つ申し上げたいと思います。○女性の中には素晴らしい仕事をしても浮き上がってこない人が多いですね。女性同士で支え合いながら、もっと違う道もやっていたらいい。広い視野に立って初めて見えてくる物もあるということです。

○子育て中は焦ってはいけません。結婚前の人生は、うんと勉強しましょう。それが子育て中の力になります。○親、特に母親とのつながりを信頼関係を築いていってほしいと思います。母親が女教師と仲良くなれば、これほど子どもにとって素晴らしい

ながりはない訳です。自分らしさを出して親の中に入っていただく。五 終わりに

自分のやりたいことを遠慮せず、どんどんやってみていただきたいと思えます。批判を受けた時は、また仲間と

「技術・家庭科」

関東ブロック大会に参加して

宮川 まゆみ

去る十月二十二日、二十三日と、「技術・家庭科」関東ブロック大会に、家庭生活領域の長野県提案者として参加させていただきました。

③豊かな思考力・判断力・表現力をもつ生徒
④生活の充実に向上にねばり強く取り組む生徒
⑤生活を豊かにしようとする実践力をもつ生徒

埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会では、『生徒のおもいを実現させ、生きる力を育てる学習指導の研究』のテーマのもとに、「一人一人の生徒が抱いた『おもい』の実現を図れるような自己の課題を設定させ、生徒が主体的に自己の課題解決を図るような指導を展開すれば、社会の変化に主体的に対応するための「生きる力」を身につけさせることができる。」という仮説にそって研究が深められて

分科会では「学んだことを活かして生活できる生徒の育成を目指して」と題する群馬県の実践発表がありました。私は、「生徒一人ひとりの家庭での実践力が育つ指導のあり方」の提案をしました。

そして、技術・家庭科の学習を通して育てたい人間像を次のようにとらえ、テーマ設定の基盤としていました。

二日間の大会を通して、教師が子どもたちに願う気持ちはどこでも同じであること。私たち教師の熱心な教材研究や授業研究は子どもたちの指導にいきる力となるということを改めて強く感じました。

①自ら意欲をもって学習する生徒
②自分の良さを理解し、個性を発揮する生徒

（相森中）

「子どもがどう授業に参加しているか」参加の視点で授業を

研究副委員長 重倉 紘一

「子どもにとつて、わかり、魅力のある授業のあり方」を中心テーマに、筑波大学教授谷川彰英先生をお迎えしての研究が五年目になる。

五年間を簡単に振り返ると、平成四年「楽しく学びがいのある授業をどうつくるか」五年「関心・意欲を育てる授業づくり」六年「授業の発想・教師の発想・子どもの発想」問題解決学習をめぐって」七年「生活知」から「学校知」を問う一二十一世紀の学校のあり方」今年度は「参加型の授業のすすめ方」の演題で、ご講演を戴きました。

五年間の谷川先生のご指導の基本は、「授業をどうやるか」という問題と「子どもが興味をもって取り組む学習」をどう作るかということだ。

これを受け、今年度の研究委員会の課題として、「児童の学習時における、活動内容の量や質に留意した授業」につけた力は何か、本質的な事をついで、試行錯誤の段階を重視した授業構想「子ども同士のかかわりを大切にした授業」を掲げ研究をすすめてきました。

四月二十日「参加型の授業のすすめ方」の谷川先生のお話では、教師が「発問をする」として「考えさせる」の授業は、三分の一が発言したらベストに近い、これには限界が

ある。子どもが授業に参加し、学校に参加し、人生に参加し、あるいは人生を作り変えていく、意欲のある子を育てる必要がある。そのために、「参加型」授業論について、視点論形態論からの提唱があった。

このお話を受けて、七月三日の研究日(1)では、森上小学校で谷川先生をお迎えして、道徳「なわとびデー2」の研究授業が行われた。

主眼を「六年生として協力しあい責任ある行動をとれずにいる子どもたちに、リーダーの一郎と対立するゆう子の間に立つ「ぼく」の行動のしかたを役割演技で発表し、話し合うことを通して、協力して責任を果たすしかたを理解し実践しようとする気持ち育てる。」として、資料自体を子どもたちが作ってほしい。という立場に立つての自作の資料作り。ロールプレイングの討論を取り入れ、モラルジレンマ状態を経て自分たちの立場から主張し過ぎたことに気づかせ、協力と責任を理解し実践しようとする気持ちを育てる授業を仕組んだ。

谷川先生からは、「大変うれしい授業を見せてください。『参加型』という話をさせていたで、今、いろいろな教科・領域で『参加』ということか考えています。今日の授業は、『道徳なら、

こういうスタイルができるんだ」ということを具体的にを見せていただき、大変参考になりました。「自分の心の問題を追求して行く、難しく、暗い道徳になる。それに対して、演じる・観る・資料作りに加われるなど、いろいろな参加の仕方を提案した。資料作りへの参加による道徳の授業というのは、本当にすごい発想だと感嘆しました。」という講評をいただきました。

私たちが授業を分析するとき、どういふ視点で授業を分析するかが大切です。「一人一人の子どもの参加にポイントとして持つとき、授業がよりはっきり描け、見えるように思います。(須坂小)

第46回長野県図書館大会に

参加して

伊藤 悦子

今年の県図書館大会は、十月十八日と十九日にわたり、飯山で開催されました。

第一目の公開授業は、開校十年目の泉台小学校で三年生の国語の授業を参観しました。「豊かな読書体験を通して、意欲的にひとり読みをする児童を育てるための指導、援助のあり方」という研究テーマのもとに、「がらがらやぎとかいぶつトル」といおぼあちゃんをすてちゃいやだ」「かめのこうらにはなせひびがあるの」の中の一つのお話を聞いて、「たいへんな問題

を解決して何か大切なものを手にする話」をもっと読みたくなり、意欲的にひとり読みをするという内容でした。その中で特に印象的だったのは、歯切れのよい子供たちの読み聞かせの声でした。

二日目は、「図書館の管理と運営」の分科会に参加しました。「魅力ある図書館をつくる管理・運営と図書館活動の工夫」「子供たちが喜んで読書するようになる図書館の管理・運営と図書館活動の工夫」という二本のレポートを中心に、話し合いが進められ

ました。私のかかえている悩みもいくつか出されました。その中で、まず司書の先生と連携をしっかりとらせることが何よりも大切であり、生きた図書館運営への第一歩であることを改めて教えられました。「子供たちが足を運びたいという工夫が必要なのです。ただ本が並んでいるだけの図書館では、魅力はないのです。図書館は「フレンドリー」で「フレッシュ」で「フリー」でなければなりません。これからは、情報基地として、図書館の果たす役割が、今まで以上に大きくなると思います。この大会に参加し、図書館の重要性を強く感じました。(須坂小)

常盤中学校は、昭和二十二年四月、学制改革により須坂町須坂中学校として発足し、翌二十三年常盤中学校となり、来年は開校五十周年を迎える。昭和二十七年五月に建設された旧校舎が取り壊され、現在の校舎に全面改築されたのは、平成二年三月のことであった。

「切磋琢磨」の額は、創立三十周年を記念して、昭和五十二年十一月に常盤中学校同窓会より寄贈されたものである。翌五十三年三月、旧体育館に掛けられ、その後新体育館に引き継がれ、現在は体育館左前面に掛けられている。

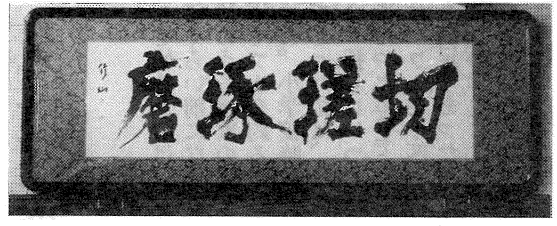
書は、日展参事の上条信山先生。同窓会からの懇願に、

「切磋琢磨」は、「常盤中学校校友会歌」の一節からとったものである。昭和四十二年度校友会は、活動のひとつとして校友から、「校友会歌」の歌詞と曲を募集した。その結果、月原千代・最上たま江作詞、清水幸子作曲の「校友会歌」が成ったのである。

友がらの
切磋琢磨の 伝統に
結びきずなは いや固し
われら常盤の 校友会

○「自主高潔」(北島茂書)
○「光 やがて世の光とならん」(赤堀昭三書)
○「校 歌」(北島茂書)
(浅岡修一)

本校の宝⑬ 常盤中学校 額「切磋琢磨」



火ばら談義



目指せ、優勝？

井上久美子

「ドッジボールの練習に行こうぜ。」

と体育館にかけ込む数人の男子たち。毎朝のドッジボール練習が夏休み明けからの子ども達の日課になっている。いつも数人から始まり、女の子の顔が増えくると、男子の子対女の子の試合になる。男の子にとって女の子相手では少々物足りないがしかたがない。

「これからキャッチボールやるよ。男子対女子ね。」

「えー、またあー。」

と男女双方から声が出るが、「もっと足をふんばって。」

「かたの力をぬいてさー。」となかなかのコーチぶりを示す男の子もいる。言われた通りに動けなくても、男の子の強いボールが取れば女の子もうれしそうである。

子ども達はN.T.Tのドッジボール大会に参加するために練習をしているのである。目的があるから練習にも熱が入る。でも、出られるのは女の子だけ。男の子は女の子のコーチとして応援団として練習

に参加しているのだ。大会当日は、お家の方の協力もあって一緒に練習してきた男の子たちの多くも応援にかけつけた。結果は、予選リーグを突破したところで敗退。残念、無念。

でも、みんなよくがんばった。ドッジボールが得意な子も苦手で消極的だった子もいっしょか女の子全員が大会に出たくて練習に取り組み、全員で戦うことができた。女の子たちが意欲的に取り組んだ姿をほめてあげたい。

一方、男の子たちは大会に出られないことがわかってい

るのに、時には女の子より一生懸命練習をしていた。最後まで女の子たちのすばらしい応援団だったと思う。「ドッジボールが好きだから、楽しいからだけではこんなになん

ばれないだろうなあ」女の子が試合に負けたのを見てくやし

がしている男の子の姿は女の子たち以上にほめてあげたいと思

った。来年は、みんなどうする気なんだろう。(須坂小)

釣り道楽

樽田実徳

私が釣りを始めたのは、今から三十年ぐらいい前になると思う。初めのうちは家の近くにある小川でフナを釣ることから始まった。小学校時代、ガキ大将であった私は、餌になる糸ミミズ採りにいつも子分を連れて行ったものである。その時は、フナを十匹も釣ればとても満足であった。

そんな私も中学生になり、近くにある小川から千曲川に目が向くようになってきた。

が震えたことを今でも憶えている。

私の田舎は篠ノ井にあり、そこら辺の千曲川ではアユ釣りの名人と言われるようになった私は、あることに巻き込まれるようになった。それは、釣りに出掛ける時、横浜ナンバーの車が後を付けてくるのである。その人には、可哀相だったが、尾行をまいて釣りに出掛けたものだ。

さて、皆さんはアユをスーパーなどで見たことがあると思うが、千曲川で育ったアユは、それとは味も形も全く違うものである。どう違うかという、身が締まっ

花壇づくりの仕事

小林将伸

ときどき一人で、学校花壇の草取りをしている。長ぐつを履いて腕まくり、手は泥まみれ。学生時代、はつきりとした夢を持っていた訳ではないが、数年後のこの姿は想像できなかった。子供の頃から畑仕事が大嫌い、将来は楽な仕事に就こうと考えて今に至る。今では、消毒液や、液体肥料を扱ったり、園芸店のおじさんと顔見知り、車のトランクには培養土やポットが載っているなど、次第にはま

っている。最近「植物は見えない根が大事。」根をはるには、土が大事。土は生命の

源。「早咲きの花は摘め。人間でも早く色気を出すのは充

分成長できない。」と、生徒に説教をすから手におえない。学校花壇作りは前任校から

肩が張っていて、油がとてものっているのである。おいしい食べ方としては、やはり塩焼きにして、酢醤油をかけ、箸で身を潰してから背骨を抜き、食べると非常においしい。また、贅沢な食べ方としては、アユを塩で洗い、滑りを取ってから昆布で巻き、砂糖・ミリン・醤油を入れてグツグツと煮るものがある。これは何とも言えない珍味である。ぜひ試して欲しい。

私は溪流・湖・海と様々な釣りをしているが、釣りはやはり最高である。(高甫小)

花を作るな。』こっちだって校務でやってるんだ。』の言葉も胸に収め、汲々水をくれた。この日の教訓は今でも生きていく。自主、主体性と言

って生徒に計画、活動させるが、子どもはちゃんとやってくれない。水くれ当番も忘れる。だから私は毎日確認をし、乾いていれば水をやる。きれいな花が咲けば、生徒をほめる。生徒は満足顔だ。K先生の教訓は生きていく。さて、今夏、我が墨坂中学校花壇づくりがコンクールで入賞した。上位ではなかったが、中学校でしかもこの大規模校での入賞に自負している。今年度は全校作業の中で、苗の植え替えを行ったが、六百余人の生徒はよく働いた。その姿は感動的で教師名刺に尽き

編集後記

例年より早い雪の便りが、各地から届くようになりまして、

学校行事も一段落しましたが、二学期のまとめに向けて忙しい日々が続いていることと思

います。今回は、研究を中心に構成しました。原稿依頼の時期が忙しい時期に重なり、執筆された先生方には、大変ご苦労していただきました。ご協力に深く感謝致します。

(岡沢・高野)